

そ
10
19

6-4
2-1

栗氏千虫譜 10冊 寄別6-4-2-1 06-001

国立国会図書館





金鐘兒 和名スミシ



略
五
五

大正
3. 10. 2
購求



金琵琶 コムシ



松籟虫考

源弘賢著

松籟——松虫の名は松葉を食すは昔は松葉の比よりちか
 ともみえ老るさすれば二虫の名古そのたうひる区松の比は三
 子ロリンとちか松籟——といひりこちかを松籟といひひり
 忠峯ぬしの西の幸 源氏物語の比よりちかハリンとちか松
 和歌の序みえ老る
 じ——子ロリンとちかと松虫といひり 松虫はみえ老るの志
 今も松葉とちか松葉を食すは昔は松葉の比よりちかハリンとちか松
 和歌の序みえ老る
 又本和歌集卷第十四松云松葉七年亭子院御門御時西の
 仍幸とちか松ひりちか忠峯は和歌の序云いひる松
 虫といひちか松ひりちか松の比よりちか松
源氏物語の西の幸ハリンとちか松
 さうの比よりちか松ひりちか松の比よりちか松



をりやうひくまんの都にわまをせある時を
 の終虫とて若此の者よあゝのそれを
弘賢曰
終の考

源氏物語に「ひ」の事云都てひる中ふ終虫のふ
弘賢曰
ひは終虫の事なり

秋乃ひの「ひ」の事云つれをき中
弘賢曰
秋乃ひの事なり

いわさるるひるひるをさるるをさるる
弘賢曰
いわさるるの事なり

けりる虫をさるるをさるるをさるる
弘賢曰
けりるの事なり

ひるひるけりるをさるるをさるるをさるる
弘賢曰
ひるひるの事なり

都細折云松虫は古類人々進々或は石炭後社月堀河内舟
弘賢曰
都細折の事なり

公事根源云樞虫はとあれから或あるとあるとありす及上
弘賢曰
公事根源の事なり

の道遥とて及上人もあれはひて後載れるとひひて虫
弘賢曰
の道遥の事なり

社月おほくは松虫の事と終人々内裏もなる又炭後の
弘賢曰
社月の事なり

年山紀云松し終ひこの都にうて名つ





せしり又とていし思は松むしあめいらるるす
 じい笑後の神友むしえんひして林重院申す
 ころりより志のなり園東とてとりちりてえす
 弘賢曰あめあるる千十ロリとてあきまきなりつとてあかりこれと源氏也
 源氏のこの名はあつりつとてあかりとては林重院申す
 同術なりとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 同術なりとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 同術なりとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 同術なりとてあつりつとてあかりとては林重院申す

松虫のしんひ云たりしや子孫とてしんひのきりし様
 音はきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 音はきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 音はきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 音はきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 音はきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す

たる冊は文の載す
 鳥北光唐江津唐百そは勤王云松むし松のきりし様
 しんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 しんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 しんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 しんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す

小寇難事云或虫云たりしやあつりつとてあかりとては林重院申す
 ろうしん世よりしんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 つらも傳年やある松虫なりしんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 松虫なりしんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 松虫なりしんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す
 松虫なりしんひのきりしとてあつりつとてあかりとては林重院申す



詩歌

松平とよめるうへ

古今和歌集巻第四 秋上

題志すは

よみ人志すは

きこ志結ふさきし 届つる物もあはら

ふらむし の音はあけりりりる

秋はふらむしとよめるうへ

舞をさるるふやちやかし

秋のうへとよめるうへ

われしゆきしつこさうらん

とよち紫はちしてはあはらむ

とねはあはらむし

玉葉和歌集巻第十三 巻第四

題志すは

よみ人志すは

夕きねとよめるうへ

いしりあはらむしとよめるうへ

拾遺和歌集巻第三 秋

題志すは

よみ人志すは

ちきりらんほしやまきねる秋はあは

人ふらむし のちえりきへをぬ

とよち紫はちしてはあはらむ

人ふらむし 乃あはらむし



古今秋歌二首第六

うらむ

黄之三首

あきね世のはむよぬわつづ行くとも
 人うらむうらむうらむあきらん
 あんびひほやさきつ穂のり
 人うらむうらむの都のあけき
 秋ねふきやとも人もあけけん
 きれとひむうらむうらむ
 夕きねう人うらむうらむのねあけ
 ひもりあむ身そひひあけぬる
 うらむをねあむうらむうらむうらむ
 あむうらむうらむうらむうらむ
 これうらむうらむ
 うらむうらむ

大徳のまは

あきね小我うらむうらむうらむ
 おうて秋ねうらむうらむうらむ

こはねうらむうらむうらむうらむうらむ
 古の葉うらむうらむうらむうらむうらむ
 秋賢回うらむうらむうらむうらむうらむ
 うらむうらむうらむうらむうらむうらむ
 うらむうらむうらむうらむうらむうらむ
 うらむうらむうらむうらむうらむうらむ

源氏物語の巻

大うらむうらむうらむうらむうらむ
 あむうらむうらむうらむうらむうらむ



弘賢曰これに似たりあまふあてをみるなり

史本和歌集卷第十四

任者社百首の歌 慈徳初め

十三首の丹のそけりてのむしりる

をけりてきりてまらりて風乃あけ

千の百首の歌 泰後神代

岩代の世はあきくさくさくをり

むしりてまらりてあけりてむしり

弘賢曰これに似たりあまふあてをみるなり
これにも古をけりてあきくさくをり

すむしりてあきくさくをり

古今和歌六非第の

むしり

たのきふらあひあてすむしり

むしりてあきくさくをり

人あきくさくをり

あきくさくをり

かりてあきくさくをり

あきくさくをり

弘賢曰これに似たりあまふあてをみるなり
これにも古をけりてあきくさくをり

源氏物語の巻

おほくさくをり

あきくさくをり



弘賢曰これに...
かきまんと...
ちりり

釋名

まらむ

蟋蟀の一種なり古今和歌集...
こみね人をよつとつ...
子ニチロリシとあり虫といふ...

中つ虫といふ大和...
曰これチニチロリシとあり...
ロリシとあり...
かきまんと...
ちりり



てみらのあふといつてくゝお古らと微きくゝたり

金鐘児表宏道役徹志列洞徒徹志秘傳花鏡○延宝八年
の常用大全よきせしとよみうり表宏道曰類役徹而韻
致悠揚如金玉系師人謂之く列洞曰黒色銃前豊後松尾
比叵江躍百以翼鳴其音磴稜々名之曰くく花鏡曰以翼鼓
鳴其声則磴稜々如小鐘然更間以紡績其声冷寒 慶長板節
用集弘賢曰かり字之 月鈴兒 延宝板節用大全

た乃二品考弘賢編集せゆ古今要覽中の一編を
栗本氏虫蝨類を写真とわ氏しるゝ年月
とんあふりたりすいゝとちたあゝはるゆ
をやいゝあゝとりにみそあゝはるゆとてた
まゝと新くすゝ新のそゝはは考と書てたゝと
こゝと新くあゝあゝをへゝとゝあゝあゝはる
かつ弘賢のめいゝにせりふゝとてすゝと
あゝにせりふゝとてすゝとてすゝとてすゝと
あゝと編集せりふゝとてすゝとてすゝと
考ゝ文字は極を西ゝゝらて洋寫の辨あゝはる
とおと新くあゝあゝをゝ文化ハとを長月申の七日
源弘賢書



つけて備ゆるいと詠し治虫はちいさの尾ふきの
治りとはまきふりいと引伸よき譯語の治しおろめ
すし仲実のよまねきそのか世の撰系ある順の
私名とり免神申お八重清お藤原景家なをまき
しつひ治らふゆりにつまみなることの紫のそあまこあ
めそこれらなるこのかやうしてそのなりこそ名のく
あうらちけとさうに志をきくうやうんあ
まのそ漢うこのふまお草綱目よりそのきり
あまそこのうのそあまきうに志をきくうやうんあ
の事いあわらふはさひ迫き比の陳漢子う花鏡よ金隆
見證後わかしなるき少隆のことしうらうと年記といふ
うまむしといふ刻とつけくあ都のもうらたあひ
しうえし白石といふ人の東雅といふふふお銚斯
のうひといふのまきし見系馬信といふおぬさき
まのやまお中お松じいまきしとた他てひけあ
治虫はちいさ西紀といふ人の種のことおまきひ
くしそ首さくやうにひけなること白く二條ありといふ
あまお洗糸のうと都よりうの茶のそそまもあま
ねくあまひわりさきかろのの上おひろくんせらに
あまおめしるあまきうこれやあまきうあまのうら
うあひうらうんとあまきうに源氏物語のすしうの巻
に二條院のことといふくあまきうの中し治虫





蠨蛸在戸



蠨蛸一名長脚 長跋 正字通
和名鈔ニアミタカノクモ
チビキガモ 筑後

アシナガクモ人ヲ咬ハ大毒アリ赤腫ヲナシ寒熱ヲ發ス此モ絲ヲ吐ク
前ノ手ニ本長ク鬚ノ如シ 行ハ遅シ

此虫一目ニメ絲ヲシ地上ヲ行ク
蟻者ノ杖ヲ探リ行状ニ似タリ
故ニ俗ニガトウクモト云フ

正字通蜘蛛長脚音長
足虫即蠨蛸長股者一名
長跋詩疏長脚河内人
謂之喜母

王子滝前ノ産アリ一舩
小ク脚殊更細ク之白シ





酉十月十八日八角クモヲ取ル全体
トヒイロニ黒褐色ノフアリ豹文ヲ有ス
刺アリトハ脚ニ出ノイカニモイカニシクオツ
ロシ



丸クモ



澤掛クモ

未詳



草葉ヲ三角ニ疊
テ内ニ葉ヲ張り棲ム
五十中里ト云処水辺
ニテ五月頃捕フ



蟪蛄一種 王子滝野川産
毒アリ流水ノ傍草上
ニアリヨク水ユラ走ル
水電ノ如シ

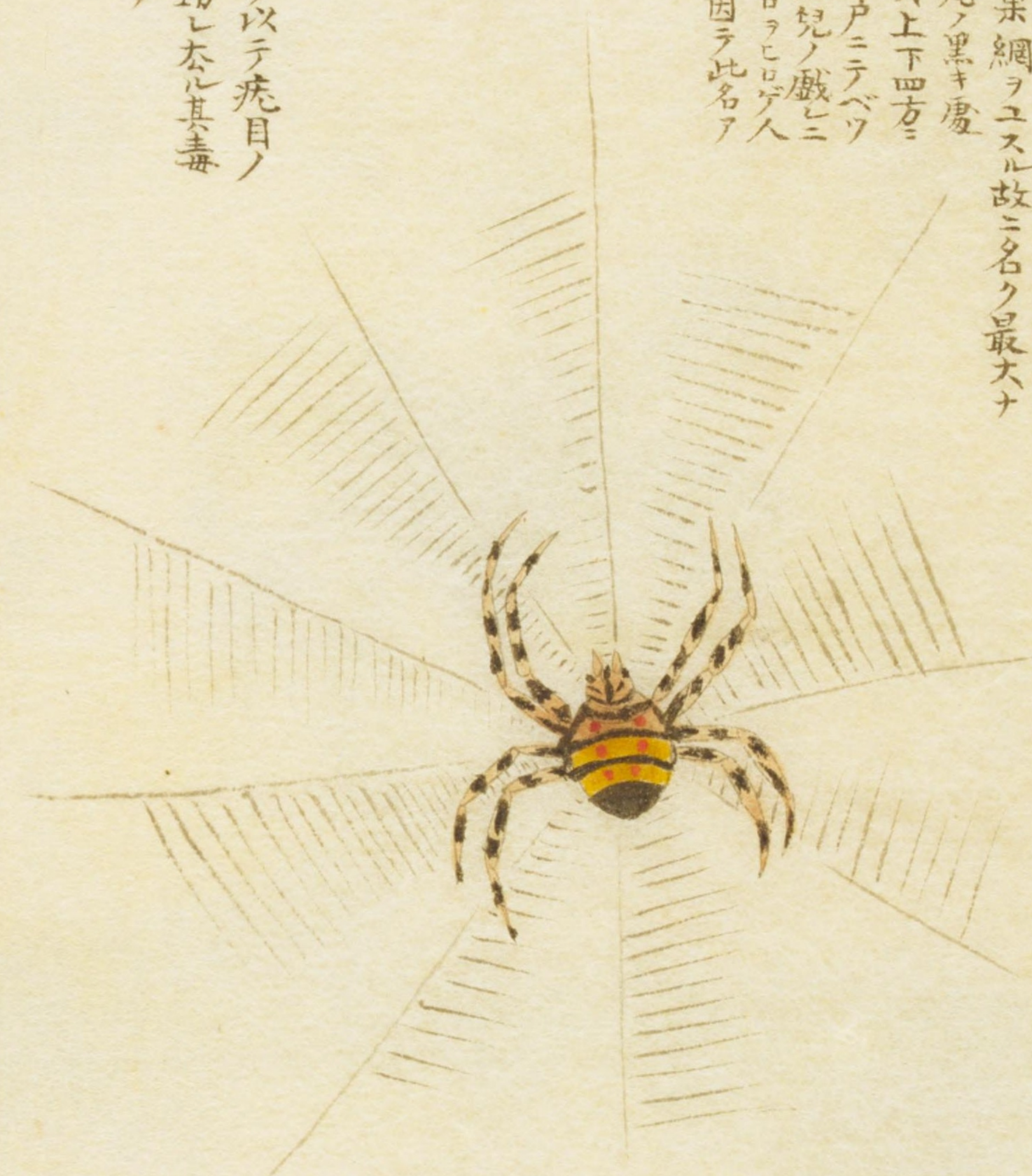
青クモ 形青豆ノ如ク混円ナリ背
上ニ眉目鼻口全備ス細筆ニテ画スル
カ如ク 四月十九日写ス
文政丙戌四月
廿三日於本
城直舎見
瑞見所持本
之ニ蜘蛛大如茨実背ニ如粉面眉目
鼻口尺具矣精工通真嚙造物者巧
戲出人意表者如斯耶嘗怪造物者
面人身者猶為帝王而稱聖人也皆出
造物者戲弄焉 石坂双吉漫録





落新婦 シヤウロクモ 毒ケモ豫州ニテ
 ハタオリカモ甲州ニテユツサケモト云物ニ觸
 レハユサクト巢網ヲユスル故ニ名ク最大ナ
 ルモノアリ此尾ノ黒キ處
 紺青色ヲナス上下四方
 ニ脚ツ、サス江戸ニテハフ
 カツユウト云小兒ノ戯ニ
 四指ヲ開テ目ロラヒロケ人
 ラ啼ス状ヲナス因テ此名アリ

此モノ、絲ヲ以テ虎目ノ
 根ヲ捺ルニ切シナル其毒
 孔ニ因テナリ



六方クモ
 前手ニ本各一處ニ並ヒ
 一本ノ如シ六方ハサス好テ
 木葉ノウラニツキテ不動
 觸ハ走ルハヤシ

小喜母 異品

尾長カモト云花ウツギニツク
 四月廿一日齒之尾至テ長ク
 形竹ノ節ト云虫ニ似タリ絲
 上ニ伸レハ脚ヲタ、ニテ絲ノ
 如クホソシ



四方クモ

享和元九月廿四日牧氏ヨリ來リ寫ス
 全体土黄色ニノトビイロヲ帯フ脊ニ黒兩
 條アリ走ル速ニ尾ヨリ絲ヲ出ス四足
 四方ヲサス因テ此名ヲ得タリ



壁錢 ヒラケモ

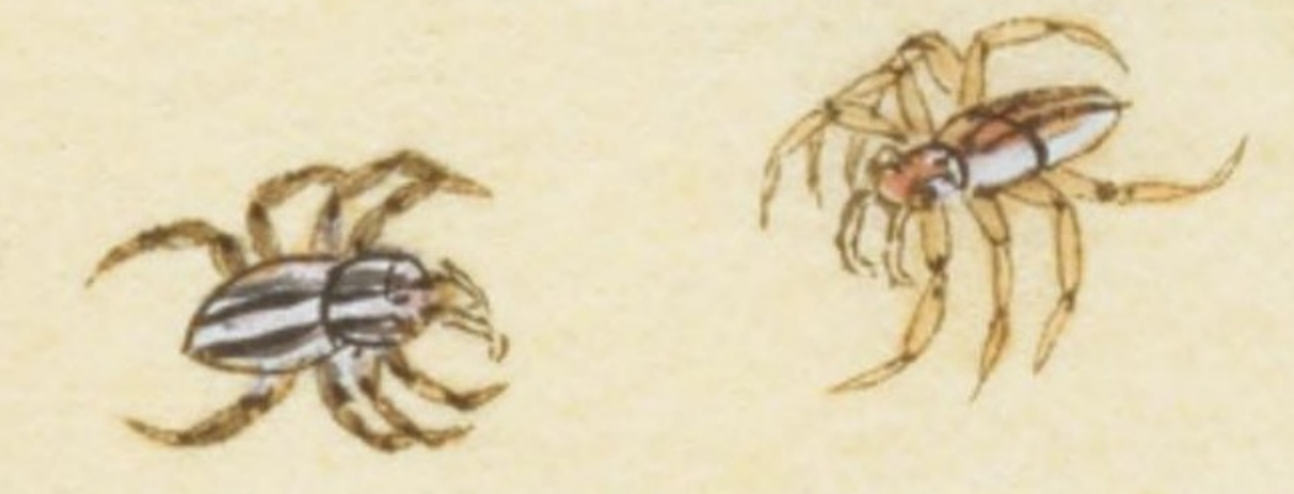




ヘツカツコウクモ

蠅取カモ一種

白濁ニ黒色ニ條アリ眼朱
ニ至テ美ナリ能蠅ヲ取
尋常ノモノニ優レリ好事人
小匣ニ養腰間ニ帯テ客對
ノ席ニ蓋ヲ開キ出ノ蠅ヲ取
ムルヲ戲トス能取モノヲ逸物
ト名付テ貴重スト云



セイタカクモ

七月三日ノ夜燈火
ノ下ニ出ル淡赤褐色
スキトホル走ルハヤシ



静看簷蛛結網低
無端妨礙小蟲飛
蜻蜒倒掛蜂兒窠
催喚山童為解圍

右范石湖詩

蕪湖縣志云大吳師蜘蛛
而結網字說云蜘蛛結一面
之網物觸而後誅之知誅
之義者也
王禹偁句云鸚鵡能言爭
似鳳蜘蛛雖巧不如蠶





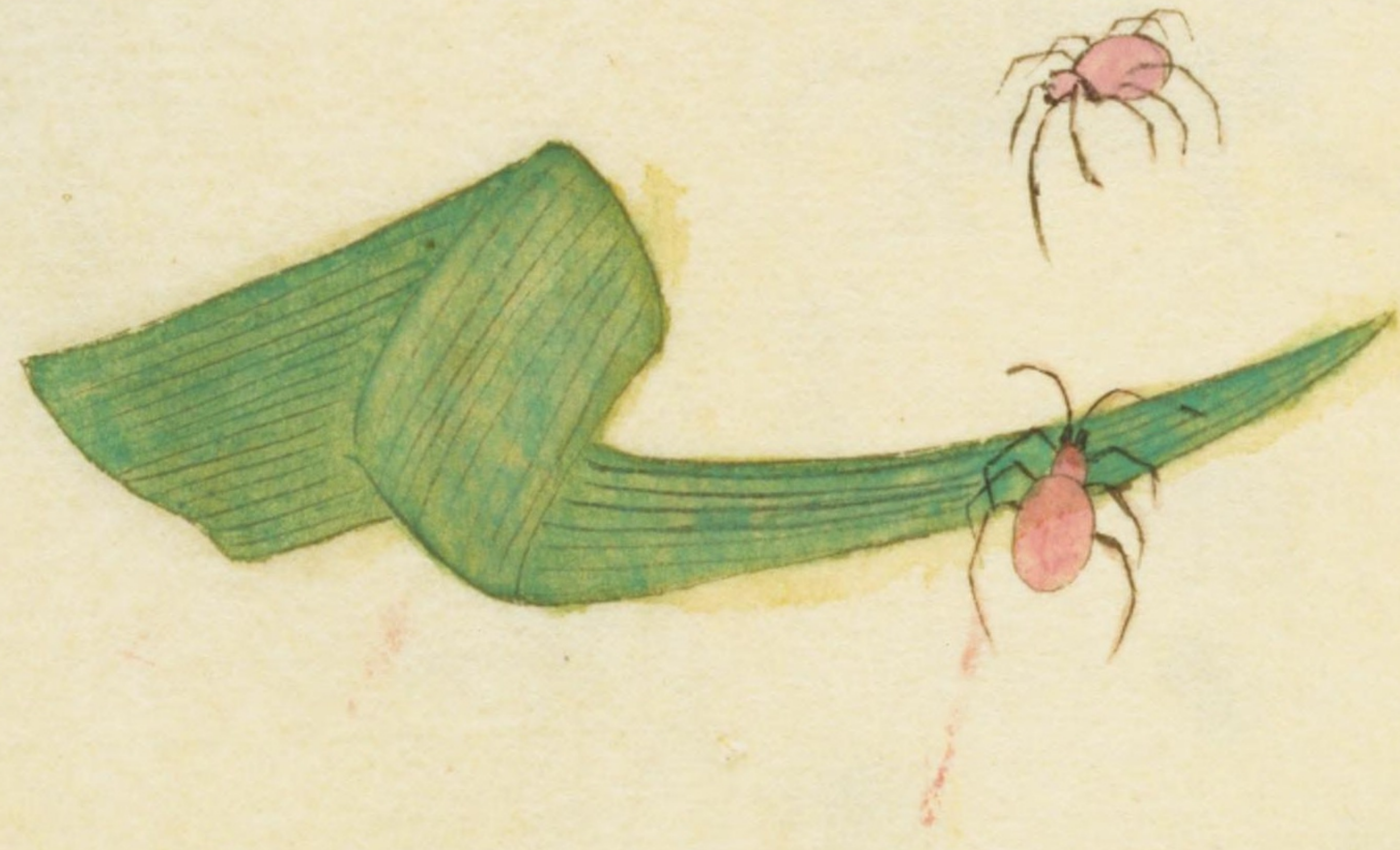
ワチクモノ一種 フクロクモアリ長ク巢ヲ作ルテ半分ヨリ下ハ地下ニ深ク穴ヲナシテ底ニ
住ム大葉蘭ノ根ニ此巢ヲ結フモノ是ナリ



ヒラクモノ一種 ニノ形圓ニノ青黒
白点アリ頭赭色ニノ脚ハウスキ肉
色ナリ壁錢ノ如キ巢ヲ作テ内ニ
居住ス

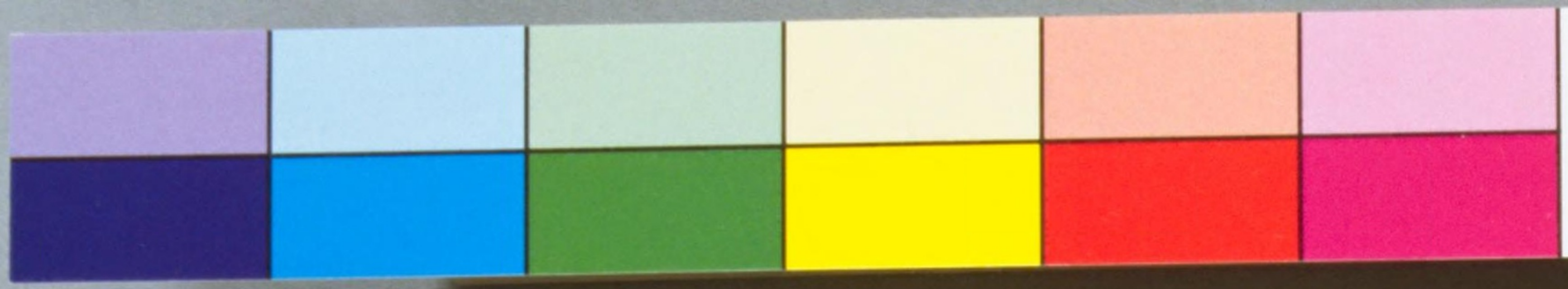


其草葉ヲタヒ其中ニ
窠ヲ作ル因ノ如シ



辰五月念四袋クモ
ノ類ハラ土器イロニ
寄ノ胎銀イロナリ





八方クモ 其脚ノ尖リ四方六方ハ
サスニ異ナリ此クモノ脚正ク八方ハサス



大島クモ



絳新婦 ジョウロウクモ



壁銭 ヒラクモ
ヒラタクモ



蠅虎 ハイトリクモ

壁銭 一種

カベクモ

巣ニ觸レハ

走出ス

布袋クモ

白キ袋ニ子ヲ盛り尾端ニ

着テ走ル荒地ノ地上畑

等ニアリ大小等カラズフ

クロクモトモズフ



袋クモ 土中ヨリ巣ヲ張りフコロノ如ク草
根ニ掛ク走ルハ遅シハラキリクモモ云フ
此モノ巣ヨリ出セバ我脚ニテ腹ヲ切ルモナリ



絛新婦 ハタオリグモ 豫州方言 ベツカツコウ 江戸
 二脚ツ、四方エ擴張ノ四脚ノ如ク小兒人ヲ嚇スニ
 眼口ニ四指ヲ當テ張廣ゲベツカツコウト云戯ル、
 形似タリ因テ此名アリ



黄色ノ斑アリ 疏名 ヲカ子グモト云フ 絲黄色ニ至テ強シ 疔根
 ヲ此絲ニテ緊ク縛レバ截去ル 毒アレハナリ 巢ノ正中ニ居ル上下
 太キ絲ニ條ヲ張ル 機ヲ織ルカ如シ 故ニハタオリグモノ名ナリ

赤グモ 未七月三日行燈ノ火ヲ
 慕テ出ツ走ルテ捷シ



糸ヲ出サズ

大蜘蛛 ミセバグモ 夜々軒頭ニ
 巢ヲ換テ新ニ張ル 敵ヲ落セハ脚ヲ



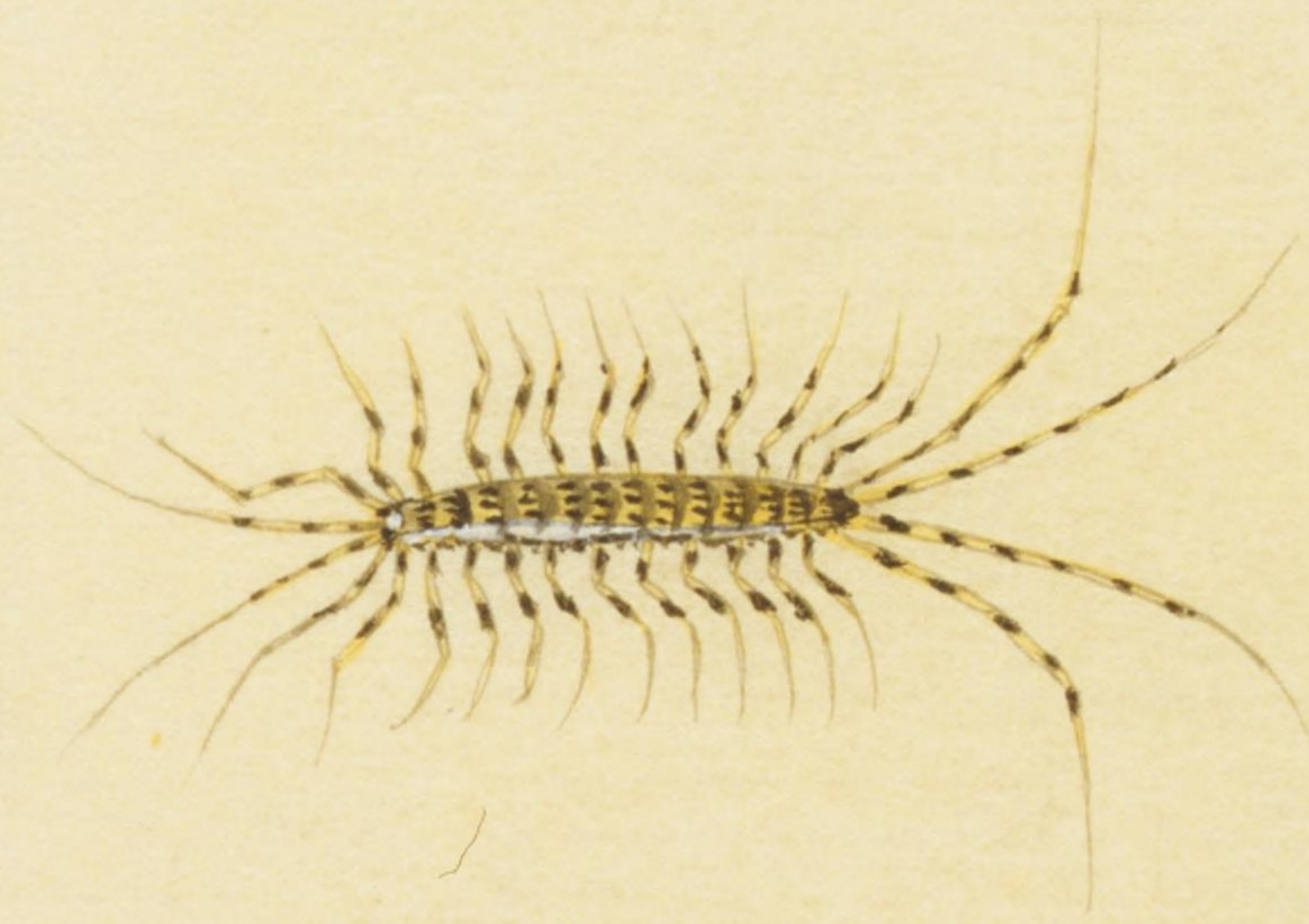
疊テ暫動カズ背ニ
 灸ヲスエレハ俄ニ
 走り逃クルモ
 ナリ

白グモ
 青クモニ似テ大色
 白シ衆ノ葉ニツク
 好テ裏ノ方ニ回り
 仰ニ着ク前脚
 長シ





ゲシカチハラ 山城上野出羽
ムマスビト長門 ゲシキ周防
アイキリ 陸奥 ケシキ大隅
コカキキリ 仙臺 ノラバムシ 加賀



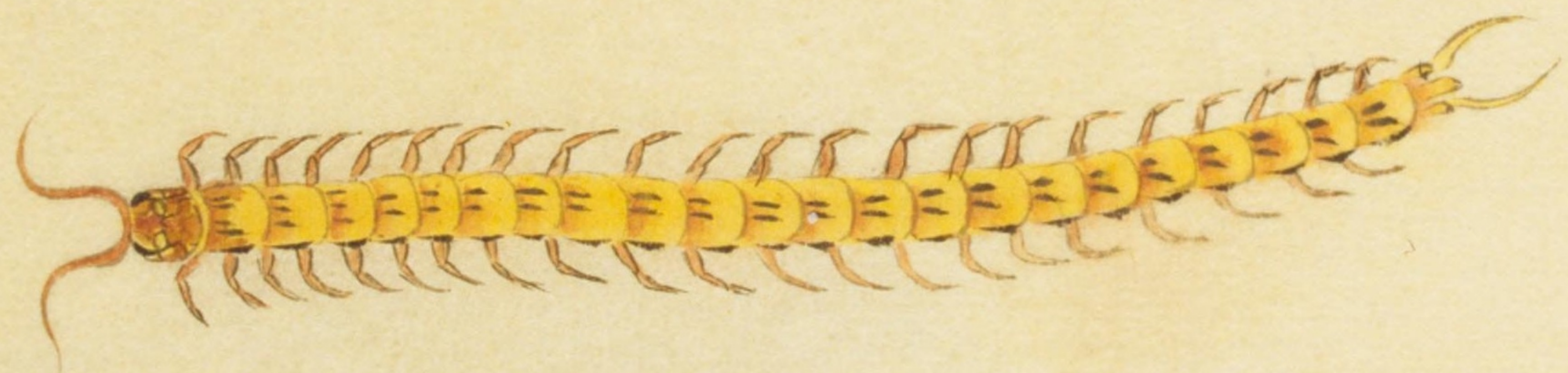
蚰蜒 一名蠸 衡一名入耳 尔雅
唐山ノ書ニ蚰蜒入耳ト云テ
恐懼スルモノ此物ヲ指テ云ナリ
ヤセムカテト云下湿地ニ生ス
尔雅郭注蚰蜒疏此虫象蜈蚣
蚰黄色而細長呼為吐古尔雅
翼蚰大者如蜈蚣色正黄
其足無數如蜈蚣状



蜈蚣 ハカチ 古訓ナリ日本紀ニ出今上總ニテ

ハカチト云古ノ称ヲ不失イ奇ト云ヘシ今普通ニムカ
デト呼フ此又和名鈔ニ見ヘタリ此モノ節々赤足ア
リテ相對ス

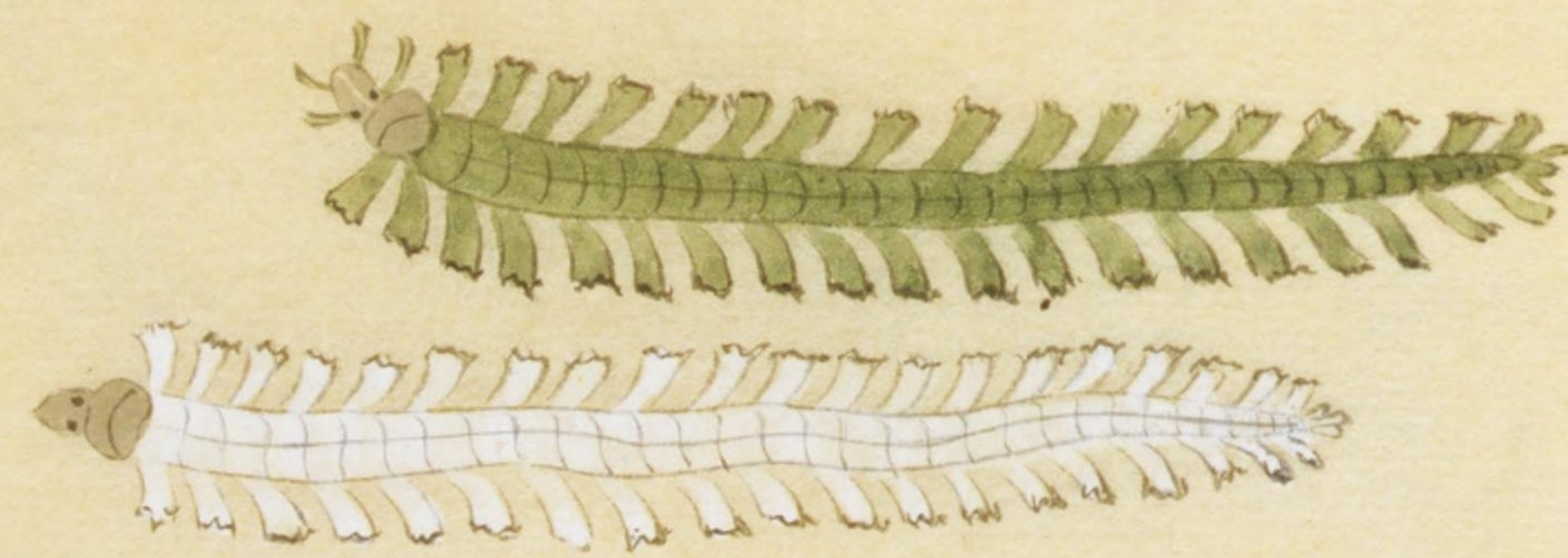
按蕪湖縣志曰五月五日取紅首者可以攻毒用
烏雞糞植之即愈最畏蛇蝎觸之ナメクヅリナリ
大和本草ニ手兩々相向フ故ニムカデト名ツクト云
事物紺珠ニ四十足ト云ル今試ニ然リ俗ニ百足ノ字
ヲ用ユルハ非ナリ幽谷土中ニハ青背青足ノモノ多シ



文化十二年乙亥冬十月豊前國小倉
中津村與萩崎村際有小流生奇蟲數
千其色五彩長三四寸許如下圖自昏至
晨浮游水上日出乃不知所之土人呼為
豊年蟲自五日至十日而不見今茲采
價殊賤是其微乎因姑畜其形以記
其實事云

西田直養誌

右ノ蟲圖并説ヲ借覽スルマ、ニ寫之此
畜モ馬真ニ非ス何ト名謂スルコト不知姑
クニ帖ノ侘日博洽君子ノ高評ヲ俟ノミ
小笠原氏本年家臣騷擾ノコアリ
亦其微ナル乎ト云人アリキ





文政壬午八月四日 西九ニテ取タル
 由山崎宗周小藍ニ入テ持参
 本城掖庭直舎ニテ圖之ハ覚故
 ニ畧寫也
 尾ニアル四本ノ足最長ク鬚ノ如
 シ本ハ太ク末上ヘソル又頭口邊ノ
 四本ハ長クホソシ



一寸ムカデ
 蜈蚣 大小アリ兩方ノ脚
 四十六本アリ





馬蛇 一名百足 錢龍 幾輔縣志

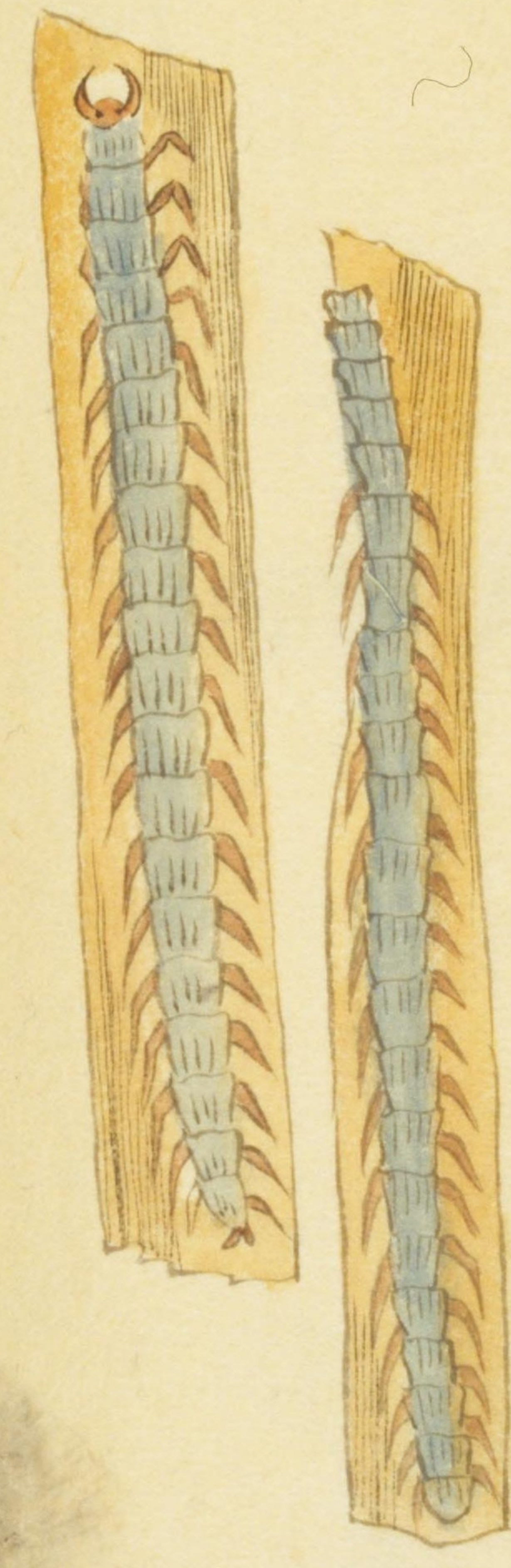
オサムシ京 ヤステ江アアマヒコ ムニサムシ 根津
セムシ用防

コレニ觸レハ輪ノ如ク丸ク蟠曲ス暫ク動カス
惡臭アリ京師モハ黒斑ナク總身赤褐色ヲ
形ナリ

赤足蜈蚣

嘉慶六年辛酉夏季羊船將來者瑞浦ヨリ同僚外科栗崎道有贈
致スモノヲ見テ寫畢 享和元年陽月念四日

腸ヲ出シ竹筴ニ貼乾シタルモノナリ長サ如圖二十節ホトアリ



ウオルニベ

淡江長伯蝦奪地ニテ圖スル
モノ大ナ如此急流水中ニ居テ
起シ見レハ付テアカルヨシ





全蠍
カリリ

享保中予実、又藍水翁福浦ニ
遊ヒテ此物ヲ壘船中ニ得タリ活
存スルヲ救十日ニメ不死々後藥
水中ニ蓄フ今ニ於テ珍藏ス新ニ
採得タルモノ、如シ

浪華岡元鳳所著毛待
呂物圖笈中以此物充卷
髮如蠶之蠶非也以叙
文長尾為蠶短尾為蠍
之說而遂誤認為一物
不可有不辨焉



全蠍

咬啗吧産壘名
スコルピオン 奇品



享保中舶来
藥水浸貯者



墨客揮犀云有虫状如蟬形小而
 遍好隱於屋壁及書策中前有
 兩長足如蟹螯觸後則旁行觸
 前則却行有鄭秀才戲以手指再
 三搔之欲觀其行忽為所螫痛臥
 數日過良醫治之得愈晉云此
 名惡颯不治殺人

紫ルニ下ニ因スル処右ニ所謂惡颯
 ナルベシアトビサリノ名砂按子ト
 同ジ名ナレモ實ハ沙椀子ノ類ニ
 非ス別ニ一種ノ小虫也

アトビサリ
 砂按子一種ノモノ
 陳久藥中偶有之
 シミト同シ秋至テ
 小觀ルニ不耐依テ
 頭微鏡ヲ以寫之

惡颯 大サ此トホリ



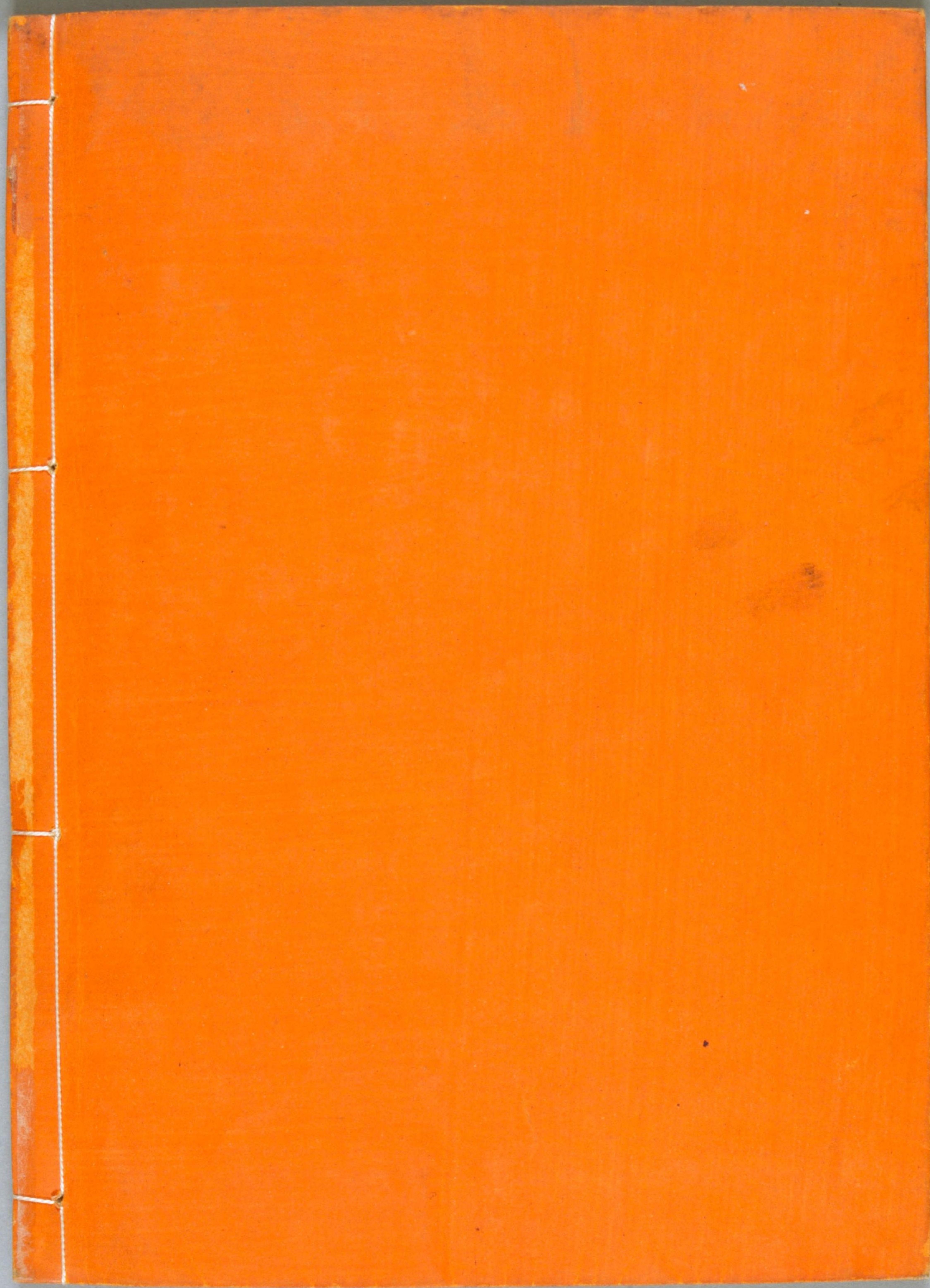
全蝎 一種極小者奇品也大毒災若
 元火蝎可乎姑舉此說于左

昌胤謹按宋弁陽周密奏辛雜識別集云北方毒螫有所謂火蝎者比之
 常蝎極小其毒酷烈常有客人數輩夏月小憩盤水忽覺辭間奇痛徹
 心不可忍遂急起索之則石面光堂初無他物
 僅行數步則通身腫潰而殞其同行異之意
 石下必有異遂起視之見一蝎極小而色黑二人
 以竹杖擊之竹皆爆裂而執行之手亦腫潰
 不旋踵而死近得杜真人持咒驅此害稍息

ウンベキ、リ

蝦夷地ノ流水中石下ニ生ス大サ因ノ如シ
 秋全ク嫩ノ如シ而年ニ鈍アリテ蟹螯ノ
 如シ長尾刺アリ土黄色又赤褐色ノ
 モノ丹色ノモノアリ至テ大毒アリ夷人毒
 箭ニ添エル藥劑ヲ別表スルニ此モノヲ入ルト云





栗氏千虫譜 10冊 寄別6-4-2-1 06-029

国立国会図書館

